



ジャン・バニエの手紙

2010年9月、トロローリーにて、

親愛なる友人の皆さまへ、

今やツバメも旅立ってしまいました。巣は空っぽです。ここオーバルで、毎日、私は巣の中にいる3羽か4羽のツバメのひなを見にやって来ました。母親ツバメがくちばしで、ひなたちに餌を与えていましたので、小さなひなたちは、日に日に大きくなりました。ひなたちは、巣の中で、互いに上になったり下になったりの押し合いへし合いで、段々と住み心地が悪くなってきました。時が来ると、ツバメの子どもたちは、親から何も教えてもらっていないのに、飛び始めました。これが自然というものの働きです。自由への飛び立ち。しばらくしてツバメたちは、旅立ちして、巣は空家になりました。どうやらこの後、彼らはアフリカの太陽を求めて離れて行くようです。来年の春、子どもたちは戻って来て、今度は、彼らが巣を作る番です。このようにして命は、循環していくのです。私たちは生まれ、成長し、旅をして、自分の家を建て、新たな命をもうけ、その子どもたちは離れ、そして私たちは天国、もうひとつの天国へと向かって飛び立ちます。



私たち全員にとっても同じ様なものでしょうね。昨年、私はジャクリーンが8月24日に、神のもとへ旅立ったことを、皆さまにお話しました。今年、私の兄弟のベルナルが旅立ちました。ベルナルは私よりも1歳半年上でした。彼は、パリの南に住んでいました。可能なときは、ベルナルに会いに行くのが私の楽しみでした。残念ながら、そんなにしばしば会いに行けませんでした。私がとても大好きなベルナルの娘であるローレンスは、私たちのために料理をしてくれたものです。(毎回、牡蠣とラムのモモ肉でした)。ベルナルと私が若い頃、私たちはとても親密でした。同じ部屋で寝て、目が覚めると、ありとあらゆるイタズラをいっしょにやりました。後年、ベルナルが住んでいたマルコーシスで、私たちは子どもの頃やっていたことをやって、笑っていました。それは私たちにとって良かったことです。それは私たちが、お互いに分かり合えることがらのようでした。

13歳の時、私はイギリスの王立海軍大学校へ行くために旅立ちました。その後、私たちの歩む道は、それほど頻繁に交差することはありませんでしたが、それでも私たちは、何とかやりくりしてお互いに会えるようにしました。会えば、それはいつも楽しかったです。ベルナルの帰天は、私の心に深い影響を与えました。友だちでもあったひとりの兄弟を、私は亡くしました。兄の死に対して哀悼のご厚情を賜るお便りをいただいた皆さまに御礼申し上げます。

これが命の輪廻(サイクル)です。私たちは、成長するようにプログラムされていますが、同時に弱くなり、そしてやがて死ぬようにとプログラムされています。

また、ツバメが持ち合わせていない、何かを考える人類や宇宙の進化もあります。実際、ツバメの種族は、それほど進化しているようには見えません。最初的人类は数百万年前、アフリカで生まれたようで、それが地上のあちこちに拡がり、自身の文化や伝統を持った一族や部族の集団を形成しました。部族の内部で、また部族間で対立があり、殺し合いや戦がありました。このような人類、人間が進化して、たくさんのことを発見しました。人間は知識においても、そして時には知恵においても成長しました。人間は有限の世界にとらわれたままでは、できませんでした。人間の心や知性に

は、無限の世界に向かって広げたいという欲望もあります。横の世界や縦の世界に。人生の意味や源、そして目的の探求。より大きな成熟に向け、ときにはひどい低落に向け、数百万年もかけて、人類には途方もない進化がありました。それぞれの世代が新しい発見をしました。この進化は、すばらしく深遠なものでしたが、同時に苦しみもありました。木で作った兵器は、今日の核兵器になったのです。

人間関係は変わりました。成熟し、更なる開心や優しさに向け、互いの相互受入れに向けて動いてきました。しかし同時に、私たちは新しい形の憎しみや暴力を目にしています。一致のうちの、人々をひとつに結び合わせていたつながりは、個人の自由を欲することによって弱まりました。進化は、すばらしくもあり、苦しいものでもあるのです。

ラルシュもまた、進化しました。いっしょに住んで、新しい形の共同体を造るために、苦しんでいた施設から来たラファエルとフィリップの2人を受け入れたのは、私が最初であったことは間違いありません。どこへ向かっているのか、あるいはラルシュはどのように発展できるのか、また発展すべきなのか、私にはわかりませんでしたので、創立者としての自分自身を見つめるのに、時間がかかりました。46年経った今、私は自分が一番幸せな創立者だと言うことができます。もう私はラルシュの組織に何の責任も担っていませんし、ジャン・クリストフとクリスティンが、すべての共同体の指導的立場にいます。彼らの知恵や、彼らが皆をひとつにまとめていくやり方に、私は驚嘆しています。私は、彼らや国際的命、共同体の命に責任を担っている他のリーダーたちに対しても、感謝したいと思います。また同時に私は、力よりもむしろ愛を通して、平和と人間性の一致に向けた進化のしるしになりたいと望むこの大きな家族の一員である人たちにも感謝を申し上げます。

同じことが「信仰と光」にも言えます。もはや私は「信仰と光」共同体にはいませんが、「信仰と光」共同体について私が耳にすることすべてが、私に大きな喜びを与えてくれています。もっとも弱い人たちやもっとも傷つきやすい人たちは、愛という使命をもって心を開き、そして私たちの社会の新しいビジョンを示し続けています。支配が力や権力によらず、むしろあるがままにお互いを愛し合う生き方の社会。私は、「信仰と光」に関する本を書き続けるように、マリー＝エレン・マチューを励ましています。私は、その本の何編かを讀ませていただきました。その本がすばらしい本になることを、私は皆さまに保証します。

私は自分の人生にとっても満足しています。私は、もはやフランス以外の国へ旅することはありません（オーバルに来ること以外は）。私は、他の世界中の共同体と同じように、ジャクリーンやハイチの共同体を訪れるのが大好きだったことは、その通りです。しかし私は、共同体の生き方について説くのを止め、単に共同体を、自分の家で、そして自分の共同体で、生きることが必要だと信じています。もはや、それぞれの人の強さや弱さについて話すのではなく、自分の脚が疲れ、自分の頭がボーとなってしまった、そういったことを自分自身の体で生きるのです。単に耐え忍ぶのではなく、徐々に弱さを受け入れながら。喜びをもって現実を受け入れながら、そして私たちが神と真の幸いを見つけるのは現実の中においてでありますから、知恵とどのように作用し合うのかを知りながら。



a meal in Le Val Fleuri, Trosly © Elodie Perriat

7月末をもって私は、ラ・フィルメの理事会議長の役を辞任いたしました。2000年に新生フィルメの誕生において、オディールをサポートできましたことは、私にとって賜物でした。2006年には、ヴェロニカがリーダーとしてオディールの後任となりました。古くからの友人であるジャン＝クロードが私の後任となって引き継いでくれました。私はこのことに、とても満足しています。そこで、福音やもっとも傷つきやすい人々のなかにおられるイエスについて、そしてどのような弱さや難しさがあるうとも一人ひとりの中に隠されているすばらしさについて話すリトリートを続けることができるのは、私にとって喜

びです。今の私の役割は、頑張るって生きること、そして私の人生を通してラルシュを告げ知らせること、多くの人にとって、とても恐ろしく苦痛に満ちた、暴力的な、全くはつきりとした希望もないこの世界において、日々の生活で、愛の小さな行いを通してラルシュを告げ知らせることです。私は告白しなければなりません、イラクでの残虐さについて、イスラエルやパレスチナで起こっていることについて、ハイチやパキスタンの状況、ロシアでの戦火について耳にしますと、自分の役割は、できるだけ人間らしく、そしてできるだけ愛に満ちて生きること、また信頼のうちに生きることだと、私は悟るのです。



Etty Hillesum
© Joods Historisch

エッティ・ヒルサム女史のことが、しばしば心に浮かびます。1942年、彼女はあの恐ろしいユダヤ人収容所で暮らしていました。そこに住むユダヤ人は、アウシュビッツで死ぬ運命でした。そしてヨーロッパ中が、ヒトラーの悪魔にとりつかれたような一味によって席捲されていた時、彼女はこのような祈っていました。

「私の主よ、どうやらあなたは、この命が間違いなく終わろうとしているこの状況を変えるような力をお持ちではないようですね。私は説明を求めているのではありません。逆に、いつの日か私たちに説明を求めるのはあなたの方です。私の心臓が鼓動を打つたびに、もっともっとはつきりと、あなたは私たちを助けることはできませんが、あなたを助けるのは私たちの方で、そして私たちのなかにある、あなたを避難させる家を最後まで守るのも私たちであるように、私には思えるのです。」

重要なこと、それは神の腕の中で生きることだと、彼女は言っているのです。

私たちが毎晩する聖務日課の、最後のお祈りの言葉が、私は好きです。

「神は私たちの逃げ場、神は私たちを守り、そしてご自分の翼で私たちをおおってくださいます。」非常に多い暴力や恐れ、不安や絶望が存在する世界で、多くの他の人たちと一しょに私たちができることは、私たちが互いに愛し合い、そして神が住んでおられる小さな平和の場所を造ることです。愛は憎しみよりも強いというしるしになることです。

平和で優しく、柔和な場所を造るためには、かつてコンスタンチノーブルの総主教アテナゴラスが言われたように、私たちは自分自身で働く必要があります。「もっとも辛い戦いは、私たちが自分自身と対峙する戦いです。私たちは、自分自身を武装解除する必要があります。」

私は、この戦いを長年にわたって、戦って参りました。それは、それは大変でしたが、やっと私は、正しくあるべきとの必要性を武装解除することができました。」平和への道は、常に謙遜の道です。

私の精神や心に、何度も何度もやって来る言葉が「いる＝存在」という単語です。空想や観念の中に逃げ込むのではなく、現実、そして他の人たちに対して存在するということです。将来の夢の中へ逃げ込む、あるいは過去を遮断するのではなく、現在の時を生きるということです。自分自身の弱さや難しさ、そして賜物を持つ、ありのままの私自身を受け入れ、そして神の臨在に向け自分自身の心を開くことです。

私は、皆さまお一人お一人と共に祈り、私の愛を皆さまにお送りします。そして皆さまの心優しいお手紙と私の誕生日に対するお祝いの言葉に対し、感謝申し上げます。

ジャン__